

H29 中学生の「税についての作文」 国税庁長官賞

豊かな暮らしを支える税

志布志市立有明中学校一年 川畑太一朗

夏休み、広々とした田んぼで稲刈りをする様子を横目に、離れた野球練習場に向かう。いつも使っている学校のグラウンドは全面補修工事中で使えないからだ。

炎天のグラウンドではいつも十人くらいの人たちが工事をしている。ブルドーザーやローラー、名前の知らない多くの重機が校庭を行き交い、トラックが何台も土を運び込む。ちょっと雨が降ると野球グラウンドはすぐにベースのある内野四カ所は魚が泳ぐほどの水たまりになる。ゴロを処理しようとする水がはねて目を直撃するし、滑り込もうものなら泥だらけだ。ファウルゾーンは草だらけで、打ち込まれたボール探しをするのは、一年生の仕事だ。これが、水はけの良い土に、草むらはフェンスになる。だから早く中学校のグラウンドで練習したい。これらにかかる工費は一千万円を超えるそうだ。これはすべて税金でまかなわれている。

ありがたいことだと思いながらペダルを踏んでいて、気がついた。七十年前は、目の前の稲刈りの光景はなかったのだ。僕の住む土地は近くを流れる菱田川より四十～五十メートルも高いところにあるシラス台地だ。だからかつては稲作ができず、サツマイモやそば、粟などしかつくることができなかった。それを豊かな土地に変えたのは、人生を賭け、台地を切り開いた野井倉甚兵衛の働きがあったからだ。十七歳の甚兵衛は、十三キロ上流から水を引いて荒れ地を広い田に作り替えようと決意を示す。しかし、難工事と労力、資金不足から、工事開始から八年経ったが、三ヘクタールの水田ができただけだった。そこで、彼は国や県に粘り強く働きかける。一時戦争で工事は中止されるが、その後、「国営開拓事業」として農林省によって工事が引き継がれる。昭和二十八年、三十四のトンネルができ、五百二十ヘクタールの水田ができた。野井倉開田にかかった費用は当時で約四億六千万円、現在のお金に換算すると二十二億円にもなるという。これもすべて税金である。

学校のグラウンド整備にしろ、開田事業にしろ、多額の資金を必要とする事業は、個人や少人数の集まりだけではどうしていけない。僕たちの一人あたりの教育費も年間百万円を超えるという。そのため、みんなで税金を納め、負担を分担している。税金は、豊かな暮らしを送るためになくてはならないものだ。もし、税金がなかったら、学校も救急車も警察も有料になる。ゴミも放置されたままになるかもしれない。

稲刈りとグラウンド工事を見ながら、税金のありがたさに感謝した。将来僕も働き出したら、いろいろな税が増えるだろうが、しっかり納めたい。すべての人のために、少しでも力になりたいからだ。グラウンド整備が終わったら、納税してくださる方々に感謝する気持ちをもって練習したい。